《授業と子ども》

ひらがなの授業（６）

―くっつきの「を」「が」「は」「へ」―

千葉　建夫

くっつき（助詞）が　わかるためには

ひらがなの学習で大変むずかしいのは、助詞の学習だ。高学年の子どもたちに「つり竿を折る」という文をひらがなで書いてもらったら、上のような書き表し方が出てきた。

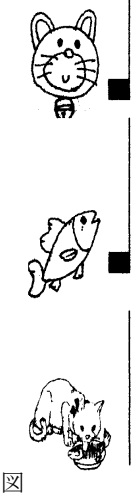
を折る

つりざおおをる
つりざをおおる
つりざををおる

現代かなづかいでは，助詞の「ワ」「オ」「エ」は、「は」「を」「へ」と書き表すようになっているけれど、一年生の教科書を見ると、早い段階で助詞は出てきているが、それが助詞だと理解させる過程がすっぽりぬけているように思う。そのために、助詞の学習は、「ことばのおわりの『ワ』『オ』『エ』は、『は』『を』『へ』と書く」という程度の指導で終わってしまい、そのまま上の学年に進級していくので、例のような間違いが起きてくるのだと思う。

助詞を正しく書けるようになるためには、これまで学習してきたように、お話は文でできているということ、その文は単語で組み立てられているということ、その単語と単語を組み合わせて文をつくるときに、助詞が必要になるという理解が必要なのである。つまり、助詞の理解のためには、文と単語の意識がどう育っているかがカギになる。

助詞については、これまで、絵を見て文作りをし、単語にわけたとき、単語に歯ブラシマークの記号（図①）をつけて意識させてきた。また、清音４４文字を学習しているときに、「りんごとみかん」のような「並列の助詞」の「と」や「いぬもねこも」のような「並列の助詞」の「も」、それに「いぬのあし」のような「もち主格」の助詞の「の」をあつかってきている。これらの学習がこれから始まる助詞「は」「が」「を」「へ」の学習の土台となってくる。


図①

指導の順序としては、「を」を最初にとりあげたい。「を」は、助詞にしか使われない文字だとはっきりしているので、助詞の役割を学習するときには分かりやすいからだ。導入する時期も、子どもたちに早い時期から文の読み・書きをさせたいと考えるなら、清音４４文字を学習したあと、前回の濁音の指導のまえに取り上げるのも一つの方法だと思う。助詞の呼び名は、「一年生のにっぽんご」（むぎ書房）では、名詞が文のなかに使われるとき、その単語のあとにくっつくという点に着目して「くっつき」ということばをつかっているので授業でもそう名づけることにした。

くっつきの「オ」は「を」をつかう

助詞の「を」の学習に入る前にこれまであつかった単語カードの中から、「お」の文字が使われている単語を集めて子どもたちと次のようなグループを作った。

お・・のように、はじめの音が「お」になる単語

・おに・おび・おなか・おりがみ・おしどり・おんしつ

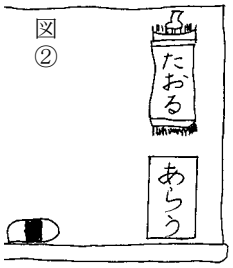
・お・のように、なかの音が「お」になる単語

・たおる・やおや・しおり・・らいおん・たいおん

・・おのように、おしまいの音が「お」になる単語

・かお・さお・しお・はなお・かつお・あさがお

この整理をしながら、ものの名前をあらわす単語のなかにある「オ」の音節は、どれも「お」で書き表すことを確かめた。それから、「を」の授業に入った。



図②

「これはなんですか？」

（たおるです）

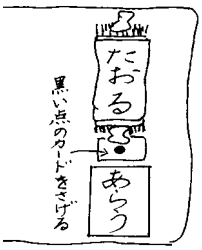
「いくつの音ですか？」

（みっつのおとです）

マジックインクでタオルの絵に「たおる」と書きこんだ。

水をいれた容器を用意しておき、

「私が今から何をするか。見ていてください」



といって、たおるを洗ってみせた。

「せんせいは、何をしましたか？」

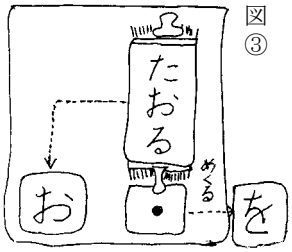
（たおるをあらった）

「あらう」という単語をひきだして、下のカードに書きこんだ。（図②）

「この『「たおる」と『あらう』の二つで、文になるかな？」

（なんだか、へんだよ。音がひとつたりない）

（オの音だよ。たおるオ、あらうじゃない）



図③

たおるの下に・のカードを下げた。（図③）

「そう、ここに、ひとつ、音がはいりますね。『たおるオ、あらう。』ですね。では、ここにオをかいてください」

（「を」を知らない子は当然、「お」とかくだろう。知っている子は「ちがうよ」と反論してくるかもしれない）

「いま、けんいち君が書いてくれた『お』は、たしかに『オ』とよみますね。これは、『たおる』の『お』と同じ字です。『あいうえお』の『お』は、『たおる』のように、ものの名前を書くときの文字に使いましたね。でも、『たおるオ、あらう』のように、文を作るときには、ものの名前の下にくっつけて使う『オ』があるのです。この『オ』をくっつきの『オ』といいます。そのときに使う字はこれなんです」

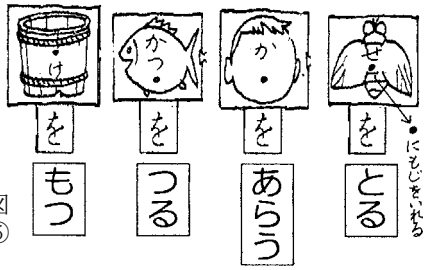
そういって「を」をきりぬいた大型模型を提示した。こ

の提示のしかたは、できるだけダイナミックにやると効果的だ。

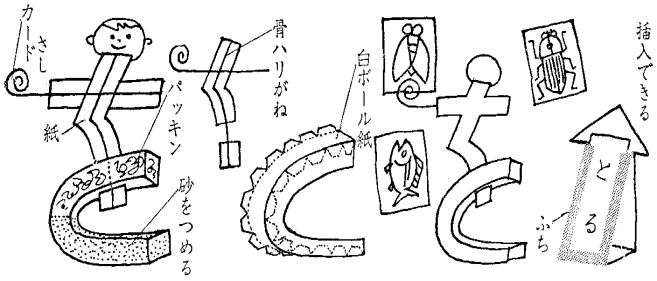
「かな文字の教え方」（麦書房）では、下のような模型（図④）の作り方が出ている。私はこれをまねて模型を発泡スチロールでくりぬいて作り、上の部分と下の部分にクリップをつけて単語カードをはさめるようにしてみた。

助詞の「を」を提示し、筆順の練習をしたあとは、この模型を使って、文づくりの練習をした。いろいろな絵カードを「を」の字の模型の上のクリップにはさんで、子どもたちに聞いた。

「せみをどうしましたか？」
（せみを、とりました）
「かおを、どうしましたか？」
（かおを、あらいました）
「かつおを、どうしましたか？」
（かつおをつりました）
「おけを、どうしましたか？」
（おけを　もちました）



図⑤



図④

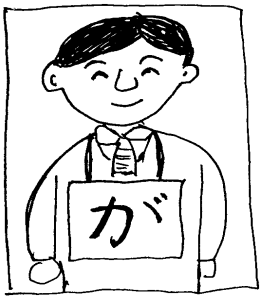
「かな文字の教えかた」より

これをまとめて視覚的に板書をし（図⑤）、それを見ながら、文の終わりに句読点をつけてノートに文字で書いた。

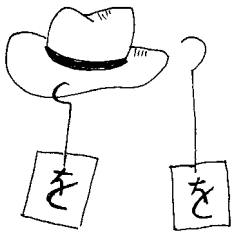
こんどは捕虫網をとりだして、昆虫の絵にかぶせて、「何を、とりますか？」と聞き、
（せみを　とります）（とんぼを　とります）
（チョウを　とります）（くわがたを　とります）
のように対象語を引き出し、同じように文を作ってノートに書いた。日常生活のなかでも「なにを、もってきてくれたの？」「なにを、見ているの？」というように、対象語を聞き出すような会話も大事な練習になると思う。

くっつきの「が」と「を」をくみあわせて

濁音の学習がおわれば、助詞「が」の学習が可能になってくる。「が」という文字は、単語に使われても助詞になっても、「ガ」という発音するので表記上の間違いはおきない。授業では、「が」が「を」とちがう主格をあらわす助詞だということがわかるように展開してみた。



教師が首に「が」と大きく書いたカードぶらさげ登場する。
「これからいろんなことします」といって、いろいろな動作をしてみせた。その姿を見て、子どもたちが、



・せんせいが　わらう。
・せんせいが　なく。
・せんせいが　ころんだ。

というような文をつくった。

次に、ぼうしをとりだし、そのぼうしにくっつきの「を」をひっかけてかぶってみせると、

・せんせいが　ぼうしを　かぶります。

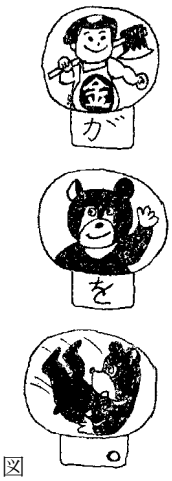
というように、文を少しくわしくすることができた。

今度は、「が」のカードとくっつきの「を」を子どもたちにわたして、それを使って動作をしてもらった。

・けいこさんが　りぼんを　むすびました。
・まきこさんが　あさがおのにおいを　かいでいる。
・ゆうたくんが　はんかちを　ふりまわした。

のような文が生まれた。できた文を板書しておくと、読んだり、ノートに書き写したりすることもできる

絵カード（図⑥）を見せて、単語と助詞を意識させて文字に直す方法も考えてみた。文作りの練習の方法はいろいろと考えられる。



図⑥

「は」は、ふたごのきょうだいがいるようだね

助詞「は」の学習は、特にむずかしい。単語のなかの「は」は「ハ」と発音し、助詞の「は」は「ワ」と発音するのだから、単語と助詞の区別がつかなければ、お手上げだ。

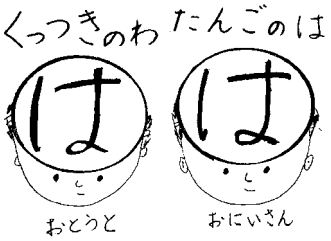
「は」の授業については、これまで学んだことを総合的に使いながら、推理を働かせてとりくめる授業にしたいと思い、次のような指導案を考えてみた。子どもたちは、この授業の流れによくのってきていたので、他の学級でも応用して使えそうな気がする。

助詞「は」の授業案例

段階	学習内容と教師のはたらきかけ	予想される子どもの反応	留意点
導入	① ものの名前の「ワ」という音は、「わ」という文字で書き表します。 （わにの絵を出す。） ・これは、何ですか？ ・いくつの音ですか？ （でんわの絵を出す。） ・これは、何ですか？ ・いくつの音ですか？ （ひまわりの絵を出す。） ・これは、何ですか？ ・いくつの音ですか？ ・三つのどの単語にも同じ音が入っています。その同じ音は何でしょうか？ ・「ワ」という音はどんな文字を書きますか？ ・「わ」という文字は、□のどこにかくれているでしょう？（あてっこをする。） □のカードを開いて「わ」を見つける。 最後に単語の全部の文字を開く。） ・単語の文字をいっしょによみましょう。 ・ものの名前のたんごの中にある「ワ」という音は、この「わ」という文字で書きます。	・わにです。 ・ふたつの音です。 ・でんわです。 ・三つの音です。 ・ひまわりです。 ・四つの音です。 ・「ワ」という音です。 と書きます。 ・で ・ん ・わ ひらく ・わ ・に ひらく ・ひ ・ま ・わ ・り ひらく	単語のの音は□であらわし□のカードを開くとその音の文字が出てくる。 ・よむときは正確に発音する。

展開		
② くっつきの「ワ」は、「わ」でなく、「は」と書き表します。 ・絵と文字カードを組み合わせましょう。 ・カードを組み合わせ、文を作りましょう。 さかな　とり　むし　くだもの ・文を作るときにほしい音は何ですか？ （くっつきに ◎の印をつける。） ・どんな文字を書きますか？ （子どもに 黒板に書いてもらう。） （両方のちがいを説明をする。） ・「にわとり」で使われた「ワ」と、「にわとり」ワで使われる「ワ」では、使い方がちがっています。 ・くっつきの「ワ」という音には、「わ」の文字は使えないのです。 ・文を作るときに、くっつきの「ワ」は「は」という文字を書きます。 ・「は」は、単語のなかにつかわれるときは「ハ」とよみます。くっつきになると「ワ」とよみます。	◎ とりです。 ◎ くだものです。 ◎ むしです。 ◎ さかなです。 ・「ワ」です。 ・「わ」です。 ・ちがうよ。「は」と書くんだよ。 （「わ」と「は」の両方が予想される。） ・「にわとり」の「ワ」は、たんご の「わ」で、「にわとり」ワ（◎）の「ワ」はくっつきの「ワ」だね。 ・どんな字を使うのかな？ は ・「は」は、「はひふへほ」の「ハ」と、同じなんだね。	・絵カード4枚、文字カード4枚。 ・文字カードの裏に「です」を用意する。 ・「かぶと むし」と「くわがた」の区別する。 ・「いわし」は出ないときに教える ・「オ」は単語で「お」、くっつきでは「を」を、「ワ」は単語で「わ」を、くっつきでは「は」を書くことを整理する。
応用		
③ くっつきの「は」を使って文づくりをする。 （「は」と書いた大きなカードを見せて） ・これは、くっつきの「は」です。 先生の首にかけます。 ・わたしは、だれですか？ ・（歩いてみせる。）何をしましたか？ ・今したことを 文にしましょう。	・せんせいです ・あるいています。 ・せんせいは あるいています。	カードの「は」の裏に「が」と書いておく。

（はしる。おどる。はねる。わらう。などの動作をし、文を作る練習をする。） ・いろいろなものに「は」のカードをつけて、文を作りましょう。 ・電動式のおもちゃにつける。 ・食べ物につける ・○○さんに つける。 （「は」のカードを返して「が」にする。） ・「は」を「が」にしても、同じような文になります。	・せんせいは はしっています。 ・せんせいは、おどっています。 ・さるは たいこを たたいている。 ・ばななは きいろい。 ・けんじくんは つくえを たたく。 （「けんじくんが つくえを たたく。」でもいいの？）	・いろいろな文を作ってみる。 ・「は」と「が」は共に主格の助詞。
まとめ 習熟する ・絵と文字カードを組み合わせた文をノートに書いてみましょう。 ・「にワとり」の「ワ」は、単語の「ワ」なので、「わ」と書きます。「にわとり」ハの「ハ」は、くっつきの「ワ」なので、「は」と書きます。 ・あとの3つの文も、文を音にだしてよんでから、文字になおしてノートに書いてみましょう。 ・ビワハ クダモノデス。 ・クワガタハ ムシデス。 ・イワシハ サカナデス。 ・正しく書けているかどうか、確かめる。	④ 文のなかでくっつきの「は」を正しく書き表す練習をする。 ◎ とりです。 にわとりは とりです。 × にはとりは とりです。 ・びわは くだものです。 ・くわがたは むしです。 ・いわしは さかなです。	・くっつきのあとにひとマスあけ、文のおしまいに○をつける。 ・単語と助詞のどれに使用されているかを確認する。



助詞「は」の授業で、「くっつきの『ワ』は、『は』の文字を使うんだよ」と教えたときに、子どもたちのなかから、「せんせい、『は』には、かおがそっくりのふたごのきょうだいがいるんだね。おにいちゃんの『は』は、（ハ）とよんで、たんごではたらくんだよ。おとうと『は』は、くっつきせんもんで、（ワ）

とよぶんだよ」という発言が出てきた。私には予想できない発言だったが、このことばで、子どもたちは、助詞の「は」の働きがよくわかったようだった。授業は、子どもたちの思いがけない発言で創られていくことがよくある。

ゆびをまげると　「へ」の字のかたち

最後に助詞「へ」の授業だ。

これまでの助詞の学習と同じように「せんだいえきエいく」というときの「エ」は、「へ」という文字を使い、「エ」とよむことを教えた。

次に学校の屋上に上がった。

「太白山はどっちのほうにありますか？」

子どもたちは太白山の方向を指でさした。

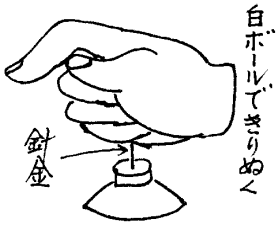
「青葉山はどっちのほうにありますか？」

今度は青葉山の方向を指さした。

「場所や行き先をあらわすときに、みんなは、指でさすでしょう。その人さし指をきゅっとまげてごらん」

「あっ、ゆびが『へ』の字になった」

それから、「へ」の字の指模型（図⑦）をとりだして見せた。この模型をつかって行き場所をさし示しながら「どこへいく？」と聞くと、子どもたちは、「えきへいく」「ながまちへいく」「でぱーとへいく」といいながら、模型のように自分の人さし指を曲げて返事を返してきた。



図⑦

「かな文字の教えかた」より

「へ」は、助詞の学習のなかで、いちばん定着がむずかしい。それは「は」「を」とくらべて、使用頻度が少ないということと、動作、作用の方向をさし示す場合を表すときに、「へ」のかわりに「に」が代用できるということによる。「えきへいく」というかわりに「えきにいく。」と書いても意味は通じるわけで、子どもによっては「へ」をほとんど使わない子もでてくる。だからといって「へ」を教えないわけにはいかない。この指の模型を教室においておくと、ときどき思い出したように「ぼくは、トイレへいく」などといっては、トイレの方向をゆびさし、きゅっと人さし指をまげて教室を出て行く子もいた。

わたしは　かわへ　さなかを　つりに　いきました。

ぼくは　やまへ　きのこを　とりに　いきました。

図⑧

助詞の学習が終わったら、いろいろな助詞を組み合わせて文作りをしていく。（図⑧）このようにして助詞が自由に使えるようになると、子どもたちの読み・書きの力は飛躍的に伸びてくるようだ。